

台湾人日本語学習者の日本語リズム特性

—自立拍・促音・拗音について—

要 旨

第1章 序論

本章の背景を言及し、日本語、台湾人中国語の音韻及び母音、子音構造などのキーワードについて説明する。第2言語の音韻を認知する際には、母語の音韻意識が大きく影響すると考えられている。つまり、第2言語の音に対応する音韻が母語に存在するかどうかによって、習得の難易が異なる。発音学習においては、発音のリズム、すなわち発話の音声単位の持続時間、いわゆる長さは、音声表現を表す重要な要素である。それを踏まえ、台湾人学習者と日本人母語話者の日本語における音声的特徴を持続時間を中心に明らかにすることで、台湾の日本語教育に、「発音」の習得について新しい観点を提供できると考えられる。

台湾人学習者における日本語音読の拍、母音、子音の持続時間について、日本語話者との相違、中国語からの影響の有無を明らかにするため、台湾人の初級、中級、上級者を対象に実験および音韻分析を行い、両者の関係性について考察していく。その結果に基づき、日本語教育における音読指導および研究の示唆について論じ、台湾の日本語音声教育指導に具体的な提言をおこなう。

第2章 台湾人学習者のリズムに関する先行研究

音韻研究と第2言語習得について、本章と最も関連がある文献を論じる。これまでの重要な先行研究を取り上げ、整理をする。

Ramus et al. (1999)は、2つの実験を行い、8つの言語、英語、オランダ語、ポーランド語、フランス語、スペイン語、イタリア語、カタロニア語、日本語を対象に、*syllable-timed language* (音節時間)、*stress-timed language* (強弱時間)、*mora-timed languages* (拍時間) の特徴について分析した。

Dellwo et al. (2003)は、発話速度による音韻的特徴を主に研究しており、母音の持続時間比率と子音の持続時間比率との相関が高く、子音の方が弁別性も母音より強いと論じている。結果は、子音の持続時間は発話速度による変動を起こすが、母音の比率(%V)は変化がないことを示している。ただし、これまでの研究について、日本語に関する研究は取り上げられていない。また、中国語が対象外となっている。

中国語の音韻分析を行った研究として、Lin & Wang (2007)はより詳細な研究の1つであるため、中国語についての考察が参考になる。しかし、その中国語話者は中国出身であり、台湾人ではない。同じ中国語を話す、中国出身と台湾出身とは違いがある。日常生活でも弁別できると思われるが、理論として、鍾榮富(2011)は中国出身と台湾出身の母音空間の差異について比較している。中国語と台湾人中国語における母音空間が異なると、それぞれ両者の母音の持続時間も異なる可能性があるため、調べる必要が考えられる。

第3章 台湾人学習者の日本語音読におけるリズム特徴

台湾人日本語学習者の初・中級を対象とし、中国語と日本語の音読における拍・母音・子音の持続時間に基づくリズム型を実証的に検討した。その結果、学習者の拍と子音リズムは日本人に比較的近いが、母音が母語話者と異なることが示され、5母音の中で/o/がもっとも逸脱が大きいことが明らかになった。これに基づき、日本語教育における音読指導及び研究の示唆について論じた。日本語母語話者、さらに中国語母語話者としての台湾人学習者の子母音のリズムは、先行研究と十分に一致していないところがあった。これは、本章およびGrabe & Low (2002)で、対象となった母語話者が3名であったことが一因であると考えられる。Ramus et al. (1999)の被験者は4名であり、Lin & Wang (2007)は6名であった。母語話者間のさまざまなレベルでの個人差は、話者のばらつきとして研究がなされつつあるが、日本語や中国語子母音リズムでどのくらいのばらつきがあるのかは必ずしもはっきりとはしていない。たとえば、Lin & Wang (2007)では、中国語の6名の%Vは53から59まで、nPVIが40から58まで、rPVIが47から60までの範囲になっている。今後の課題としては、日本語話者についてどのくらいのばらつきがあるのか、またそのばらつきの原因は何かを明らかにする基礎研究が必要

である。

第4章 台湾人学習者の音読における促音語の特徴

促音語の習得では台湾人学習者にとって非常に重要な段階である。その音韻的特徴を明らかにするため、台湾在住の中級学習者を対象に、促音語と非促音語について繰り返しの音読実験を行い、阻害音（妨げ音）及び前後の母音の持続時間に焦点を当て、日本人話者のデータと比較した。学習時間が増えにつれ、促音における習得状況が変わっているかどうかを検討するため、広島在住の台湾人留学生、いわゆる JSL 環境の台湾人超級学習者 3 名を対象に、同じ手順を踏まえて録音した。その結果、促音持続時間が安定している日本人に対し、中級学習者の場合、実験対象語の種類に関わらず、ほぼ全員、普通の短子音より重子音を長く発音している傾向が見られ、バラつきも大きいことが分かった。促音語の習得は 2 段階で構成することが考えられる。特に第 2 段階については、明示的な指示が提供されていないかぎり、上級学習者にとっても達成するのが極めて困難だと思われる。

第5章 台湾人学習者における促音に隣接する母音の持続時間

促音の閉鎖持続時間（Q）と先行母音（V1）、後続母音（V2）との比率に焦点を当て、10 名の台湾人初級学習者を対象に音響分析を行った。対照群として 4 名の日本人母語話者が加わった。さらに、学習者の学習時間が増えるに伴い、どのような変化が見られるかを明らかにするため、同じ実験材料と実験手続きで台湾人上級学習者 10 名にも行い、音響分析をした。その結果、以下の点が観察された。

(1) 促音前後の母音比（V1/V2）について、日本人母語話者は 1 より上回っているのに対し、学習者の V1/V2 の値が 1 より小さくなっており、促音の後続母音を先行母音より必要以上に長く発音してしまう傾向が見られる。このことは洪（2011）の「初級学習者には促音の直前にくる母音を長く発音する傾向」とは正反対の結果となった。

(2) (1) の現象は、上級者組では改善されたように見られた。学習時間が増えるに伴い、促音の前後母音における持続時間のコントロールができるようになったと考えられる。

(3) 日本人母語話者の場合、9つの対象語の中、2つの「ちょっと」のV1/V2のみ、他の対象語と異なる傾向が観察された。先行母音より後続母音のほうが長く、V1/V2の値が1より小さくなっていることが分かった。これは、副詞の「ちょっと」に強調の意図が入って音読する場合、促音の後続母音がいつもの促音より長くなってしまおうと考えられる。

第6章 台湾人初級学習者における拗音の音響的分析

日本語らしい発音には拍という概念が重要であることはよく知られているが、拍言語ではない漢字圏の台湾人にとって拍は認識が難しい単位である。そのことは台湾人日本語学習者にとって見慣れない特殊拍や拗音の習得の難しさにつながる。しかし、特殊拍に関する研究が数多く見られるにもかかわらず、拗音についてはまだ不十分である。特に初級学習者の場合、拗音の習得にも問題点が存在している。例えば、「としょかん（図書館）」を「としようかん」に発音してしまう長音化現象などはよく指摘される。

本章では、拗音が語尾にある場合、台湾人初級学習者は中国語の発話特徴に影響され、拗音を伸ばして発音してしまう傾向があるという仮説を立てた。それを明らかにするため、20名の台湾人初級日本語学習者を対象に拗音の音読実験を行った。収集したデータの持続時間を分析し、拗音の長音化の有無及び日本語、中国語両方のリズムの観点から検討して考察した。本研究の実験結果を検討することによって台湾人初級日本語学習者における拗音の音響的特徴及び原因究明に迫るし、台湾の日本語音声教育指導に具体的な提言ができる。

第7章 台湾人学習者における中国語音読の2音節音韻的特徴

日本語学習者の発音傾向の調査では長音や促音などの特殊拍の指摘が特に多い。日本語音声の中間言語研究において、特殊拍の知覚と産出に関わる問題もたびたび指摘されている。その中でよく指摘される点の1つは、長音の誤挿入である。中国語母語話者の視点からすると、母語のリズムによる影響が大きいと考えられる。

本章では、「リズムの等時性を持っていない台湾人中国語の場合、2音節単語を発話する時、第2音節は第1音節より長く発音される特徴がある」とい

う仮説を立て、同じ実験対象者の日本語音読と中国語音読を分析し、検証した。その結果、台湾人中国語の2音節の場合、第2音節は第1音節より長く発音される特徴があり、それによる日本語音読への干渉が観察された。それを踏まえて、日本語教育における音読指導および研究の示唆について論じた。

第8章 結論

持続時間の音響分析は、極めて緻密な作業であるため、分析する対象者数と対象語は大量化できず、本論文の限界だと言わざるを得ない。台湾人学習者の拍持続時間を各レベルについて概略的に把握したが、実験面の総合的注視点として、異なるレベルの学習者に対する実験は、初級レベルには未知語を実験語から除外する配慮が必要である。実験対象語および実験対象者の数を増やすのも、本論文の重要な課題だと思われる。研究課題においては、どの学習レベルで、どれぐらいの対象者について検討するか、より厳密な実験をデザインするかが問題として残る。

本論文で、これまで行ってきた文章音読における対象語の音響分析は、語彙項目のみを対象とする研究と異なる結果が生じるかなど、まだ多くの課題を残している。結論として本論文は台湾の音読教育と音読習得についての基礎研究とし位置づけられる。研究結果により意味深い示唆を提供できると確信している。